

地方からの大学進学における日常的な進路指導

—教師と生徒の認識に着目して—

名古屋大学大学院 上地香杜

【キーワード】 地方からの大学進学, 地方高校, 日常的な進路指導, 地域移動

1 問題の所在

本稿の目的は、教師と生徒のインタビューデータをもとにして、地方からの大学進学における進路指導の様相を明らかにすることである。それによって、地方における人材育成機関としての高校教育の役割について考察を行う。

「地方創生」政策に代表されるように、近年では地方へ注目が集まっている。2014年の第二次安倍内閣の中心的な政策として「地方創生」政策が掲げられて以降、地方という「まち」、地方に住む「ひと」、地方での「しごと」を活性化させるための策が講じられている⁽¹⁾。その策の中心は、若者の雇用の拡大と人口流出の抑止である。地方を活性化させるためには若い「ひと」の確保が不可欠であるため、地方に若者の働く場を提供することで、若者の都市部への流出を抑え、人口減少を食い止めようとしている。

一方で、地方の若者は一度都市部への流出をしたのちに、地方へと戻ってくるUターンの傾向も指摘され、とくに大卒者に限定すると、地元回帰の傾向は都市部の若者よりも地方の若者の方が高い⁽²⁾。こうした大学進学時、または大学卒業時における地域移動については高等教育の分野において積極的に研究されてきたが⁽³⁾、一度目の地域移動の契機は高校卒業時点の大学進学時点であるにもかかわらず、高校教育の分野では大学進学と地域移動については積極的に取り上げられてきていない。例えば、津多による自県/県外進学率・収容率の経年変化を明らかにした論稿においても、高校教育の現場に対する示唆は述べられているが⁽⁴⁾、高校教育の側から大学進学と地域移動について分析をしたわけではない。そのため、高校教育において大学進学と地域移動は、どのようにとらえられ、実際の進路指導がどのように行われているのかは明らかにされていない。少子化にともなう人口減少は日本社会の抱える大きな課題であるが、地方においてはその課題は眼前に迫るものである。地方が抱える人口減少の問題に対して、高校教育側が何を考え、どのようなことができるのかを考えていくことは、地方の存続にかかわる重要な事項だといえよう。

2 先行研究の検討と分析の視点

(1) 先行研究の検討：地方高校の研究

近年の代表的な地方高校研究として、高校魅力化・活性化事業についての研究がある⁽⁵⁾。ここでは、島根県の離島・中山間地域における高校教育政策を取り上げ、そこでの教育効果や教育実態が分析されている。高校教育は地方の「主要なエンジン」⁽⁶⁾であるため、高校は地方の若者を育成する重要な機関と位置づけられている。高校での教師との友好的な関係性や熱心な指導が卒業後の生徒の生活基盤を支える可能性も示されている⁽⁷⁾。つまり、高校教育は単に高校3年間の教育を担うだけでなく、生徒の高校卒業後の生活基盤を作る一端を担っているのである。

また、進路指導については地方ならではの様相が明らかにされている。例えば、教師が生徒に対して大学進学を勧めても、生徒または保護者から地元に残るために就職したいという希望がよせられる事例⁽⁸⁾や、地方の工業高校の教師に対するインタビュー調査から、地域の人材を育てることを重視した教育がなされていることも明らかにされている⁽⁹⁾。つまり、先行研究では必ずしも進学を良しとしない地方の文化の存在と、地域の人材を育てることを目的とする地方高校の価値観が明らかにされている。

一方、これらの先行研究には次のような指摘ができる。まず、島根県の事例は先駆的なモデルケースであるといえる。他県出身者が島根県の町に越境入学してくることで高校を維持・継続させる点などは、ほかの地域での実践例もあるが、いまだ特殊なケースだといえよう。加えて、そこで描かれているのは「地域に残る」生徒の姿である。先にあげた進路指導に関する研究にも当てはまることではあるが、研究対象が高校ランクでみると下位校、または専門高校を対象としているため、生徒の卒業後の進路は主に就職、とくに地元就職である。地方からの大学進学については吉川⁽¹⁰⁾が島根県の高校を対象として、高校から大学への進学時に生じる移動パターンをローカル・トラックと称して分析した研究があるが、この研究は高等教育の分野の研究と同様に移動経路を描くことに注視しているために高校教育の側面に着目した研究ではない。

そのため、地方の人材を育成する基盤となる高校教育において、地方独自の価値観をもとした教育実践が大学進学の文脈においてどのように行われているのかを明らかにすることで、地方における人材育成の新たな端緒を明らかにできると考えられる。

(2) 分析の視点：教師と生徒の両側面からとらえる日常的な進路指導

地方からの大学進学を高校教育の側から分析するにあたって、重要になるのは教師による進路指導である。進路指導は、「卒業時の進路をどう選択するかを含めて、更にどういう人間になり、どう生きていくことが望ましいのかといった長期的展望に立って指導・援助するという意味で『生き方の指導』とも言える教育活動」⁽¹¹⁾とされている。大多和⁽¹²⁾は、教師が生徒を学校生活にインボルブメントする(埋め込む)ことによって、有効な関係性を築くことができていると指摘し、その際に教師は生徒の自主性を支援しつつ、生徒が進路形成のプロセスから外れないようにする巧みな教育実践を行うことが明らかにしている。このように現場の教師は生徒の考えを尊重しながら、公式のような画一的な指導だけでなく、その学校の持つ文脈に応じた教授法を確立しているのである。こうした個々の学校の指導方法を古賀は「現場の教授学」と称している⁽¹³⁾。この学校、この生徒に対してだからこそ導かれる、それぞれの教授法を教師は有しているのである。そのため、現場の教師は様々なローカルな要因をふまえた独自の教授法を用いながら、日々の指導にあたっているといえる。また同時に重要になるのは、教師の指導を生徒がどのように受け止めるか、ということである。当然ながら、教師が一方向的に指導をしても、それが生徒に伝わらなければ意味がない。そのため、教師からの指導という一側面からではなく、生徒が指導をどのようにとらえているのかをという教師・生徒の両側面から進路指導をとらえることが重要である。

加えて、進路指導については日常的な指導場面を取りあげることが重要視されている。なぜなら、「生徒たちの進路意識や進路選択行動は入学後からの学校経験と無縁ではない」⁽¹⁴⁾ため、具体的な卒業後の進路の分類や進路を決定する局面のみを対象とするだけでは不十分なのである。

そこで、本稿では地方からの大学進学に着目し、日常的な進路指導に対する教師の認識と生徒の認識の両側面からとらえることとする。具体的には、教師は大学進学について地方の状況をどのようにとらえた上で指導しているのか、また生徒はそうした指導をどのようにとらえているのかを明らかにすることで、地方からの大学進学における進路指導を明らかにする。そのことを通して、人口減少社会における地域移動と高校教育の役割について考察する。

3 分析対象・研究参加者の概要

分析対象は、地方X県にあるY高校の教師と生徒を対象としたインタビューデータである。まずは、X県とY高校について説明する。

X県は人口90万人程度の自治体であり、「地方県」⁽¹⁵⁾に位置する。Y高校は県南部の市に位置する公立高校である。偏差値は50程度であるが、近隣に普通科のある高校はY高校のみということもあって、当該地域では「進学校」とされている。大学進学率はおおよそ50%程度である⁽¹⁶⁾。所在地である市は県庁所在地ではなく、人口も3万人程度の小規模自治体である。そのため周囲に大学は存在せず、地理的状况および交通網の未整備によって大学進学を選択した際には県内大学であっても自宅外通学を余儀なくされる。つまり、Y高校の生徒は大学進学をするにあたっては地域移動を伴うのである。大学進学と地域移動の研究では、自県進学か県外進学かどうかには焦点が当てられてきたが⁽¹⁷⁾、自県進学においても地域移動を伴うケースは当然ながら起こりうる。このように、地方のなかでもより辺鄙な場所を「地方の地方」⁽¹⁸⁾と称することもあるが、まさに今回の事例は「地方の地方」からの大学進学といえるだろう。つまりは、本稿の対象は地方の課題が集積している地域からの大学進学の事例としてとらえることができる。

表1. 研究参加者(教師)一覧

氏名(仮)	性別	年齢	担当教科	現在の役職	Y高校での勤務年数
A先生	男	50代	数学	教務部長	20年
B先生	男	50代	社会	副担任(進路・就職主任)	14年
C先生	女	40代	国語	担任(進路・進学担当)	18年
D先生	女	40代	英語	担任	15年
E先生	女	20代	社会	副担任	2年

表2. 研究参加者(生徒)一覧

氏名(仮)	学年	性別	親の学歴 (父/母)	親の職業 (父/母)	志望する学部
Fさん	高3	女	高卒/高卒	自営業/会社員	看護
Gさん	高3	女	高卒/高卒	公務員/公務員	看護
Hさん	高3	女	四大/四大	自営業	薬
Iさん	高3	女	四大/短大	会社員/会社員	国際関係
Jさん	高3	男	四大/短大	講師/自営業	芸術

筆者は2014年8月から2018年8月に至るまで、Y高校において教師と生徒への継続的なインタビュー調査と資料収集を行ってきた。本稿では、2014年8月にインタビュー調査を行った教師5名、生徒5名の語りをを用いる。これらの研究参加者には現在(2019年4月)に至るまで年に1~2回程度の追跡調査を実施しているため、データを解釈する際に有効だと判断した。またA~D先生はY高校での勤務歴も長く、管理職からも学校の中心人物として期待されている教員である。研究参加者の詳細は表1と表2に示した。研究参加者の選定については、筆者の友人の教師よりC先生を紹介してもらい、そこからスノボウルサンプリングの形式をとった。具体的には、C先生からほかの教員を年齢・性別・担当教科に偏りがないように紹介してもらい、その後、その教師らのクラスの生徒、もしくは交流がある生徒を中心にインタビュー調査を実施した。なお、匿名性の担保のため氏名は仮名とし、引用するインタビューデータは内容が変わらない範囲で加筆・修正を行った。なお、語りの中において、筆者による補足を加えた箇所は()内に表記する。

4 分析

(1) 地域移動に関する教師と生徒の認識

まず、地方からの大学進学における地域移動について、教師と生徒はどのようにとらえているのかを見ていこう。先に述べた通り、Y高校の生徒は自県進学であっても地域移動を伴う。生徒は地域移動について、次のように語っている。

〈Jさんの語り〉

Jさん：ここからだど、どこに行くのも一人暮らしだし。それはまあしょうがないですよね。

筆者：いやだなあとか思う？

Jさん：いや、まあないもんはないし。(笑)

〈Fさんの語り〉

筆者：例えば、X県には志望する学部の大学はないかな？

Fさん：あー、あるんですけど。でも、X県からは出てみようっていうのはあったんで。とりあえず、このド田舎からちょっと出てみたいって言うのはちょっとあるんで。映画館とか、カフェとか。そういうの都会に行けばあるし、そういうの楽しみたい。

Jさんの語りに代表されるように、生徒は大学進学に地域移動を伴うことを当然のこととして受け入れていた。そのうえで、Fさんは「ド田舎」から「出たい」という旨を語り、その理由には、都会へのあこがれを語っている。先行研究では、大学進学時における地域移動のプッシュ要因としての「志望する学部がないこと」が明らかにされている⁽¹⁹⁾が、ここでは志望する学部の有無よりも都会へのあこがれをもとに移動先を考えているようである。加えて、大学卒業後の進路についても聞き取りをおこなった。

〈Jさんの語り〉

筆者：じゃあ大学、ちょっと都会に行って、大学卒業した後、こっちに帰って来たい？

Jさん：帰ってこれるんなら帰って来たい。

筆者：都会の大学でて、でもやっぱりこっちに戻って来たいって思うのはなんで？

Jさん：たぶんいつかはY市が恋しくなるんやろうなっていうのはあるし、いずれはって。

こうした地元回帰の傾向は、F～Jさん全員に見られ、地方の若者の地元回帰志向という先行研究と同じ傾向であった。さらに、こうした地元回帰の希望は進学する大学・学部にも影響を与えていた。

〈Fさんの語り〉

筆者：看護師を目指したのはどうして？

Fさん：看護師だったら、こっちにも帰ってきやすいし。

〈Gさんの語り〉

筆者：看護師を目指したのはなんでなん？

Gさん：せっかく大学いくんやったら、資格とれるとこって思って。それで、いろいろ見ても、1年のときに看護の体験いったんですよ。それで、看護師っていいなあって。親もそれだったら、帰ってこれるし就職もしやすいって。(中略)働くのは地元がいいです。

このように、彼・彼女たちが地元に戻るための手段として進学先を選定している様子が見えがえる。地元に戻るために、就職のしやすい資格の職業を希望し、それに見合った大学・学部を選定しているのである。地元に残るために大学進学ではなく、就職を選択するという地方独自の価値観が明らかにされているが⁽²⁰⁾、大学進学を選択する場合においてもあくまで地元に戻ることを念頭においた進学動機が形成されていることがうかがえる。

それでは、教師は進路指導において、このような生徒の希望についてどのようにとらえているのであろうか。

〈A先生の語り〉

わたしは生徒がやりたいことをできるようにサポートするだけ。将来、戻ってくるかどうかなんて、今の時点ではわからないでしょ。

〈C先生の語り〉

大学を卒業して、就職するときにあんまり地元から離れると大変かな、って思って、大学を紹介するときとかは考えたりするかな。でも、生徒が、本人が行きたいかどうか、だからね。

このように、教師たちは生徒のやりたいことを支援することを第一に考え、地域移動については生徒のやりたいことの次に考えられている程度で、さほど重要ではないようにも見える。一方で、Y高校からの大学進学についてD先生は次のような意味があると語ってくれた。

〈D先生の語り〉

うちとしては、地域に貢献したいという気持ちは強く持っています。「人を育てる」ことに

対しての責任がありますからね。(中略)大学へ行くってということは、ここから出ていくってことを前提としていますけど、でも、大学へ行って戻ってくる生徒も多くなります。大学でいろいろな経験して戻ってきてくれたり、それこそ資格を取って、とか。そういう子がいてくれたら嬉しいし、そういう子が少しでもでてくれたらありがたいですね。

Y高校から大学進学者を輩出するということは、地域への貢献として受け取っているのである。しかも、語りのなかではただ大学進学をするだけではなくて、地元に戻ってくる生徒がいることも想定している。周辺地域においてY高校が唯一の進学校であるため、Y高校は貴重な大卒人材を生み出す場でもある。そうした大卒人材を育成するという責務を教師側が感じているといえる。

(2) 大学進学へ導く進学対策についての教師と生徒の意識

Y高校の大学進学率は例年50%程度であり、国公立大学合格者も最近10年間では毎年30～50名程度である⁽²¹⁾。進学実績の背景をC先生は「使命」という言葉を用いて実情を語ってくれた。

〈C先生の語り〉

3年生の最初に進路アンケートを行うわけなんだけど、だいたい100人前後が国公立(大学)に行きたいという希望を出してくれる。どうい理由で希望しているかはわからないけど、少なくとも行きたいという希望を叶えられるようにサポートしていくって言うのも一つの使命だと思うから。

大和⁽²²⁾は都市部の下位校では、生徒を学校にひきつけるために生徒のやりたいことを尊重するような形で教育実践が繰り返されると述べている。C先生の語りからは、生徒の「進学したい」という希望に対して、それを叶えることを「使命」として受け取っている。

表3. Y高校における進学対策(高校3年生向け)

進学対策	実施時期	内容
模試	1か月に2～4回 (主に土曜日に実施)	・マークシート式模試(年10回) ・記述式模試(年5回) ・小論文模試(年2回) ・大学別・学部別模試(年3回)
日常補習	平日の授業後	・英語・国語・数学 二次試験/センター試験/医療系の3つの分野で実施
特別補習	春期・夏期・冬期休業中	・日常補習の内容に加えて、地歴・公民・理科も実施
進路講演会	年2回(6月・7月)	・外部講師による進路に関する講話
サテライト講座	1年中	・社会・理科 大手予備校の授業をDVDにて視聴して学習

それではY高校では「使命」を果たすために、つまりは地方からの大学進学を実現するために具体的にはどのような取り組みが行われているのだろうか。Y高校における高校3年生向けの進

学対策をまとめたのが表3である⁽²³⁾。Y高校の周辺に大学がないことに加えて、大学進学に対応した塾などの民間教育施設も少ない。そこでY高校では授業以外の補習や、大手予備校主催の模試を学校で実施するなどして、大学進学のための具体的な対策を立てている。とくに模試、日常補習、特別補習は教師が直接的にかかわっている。模試は休日ではあるが試験監督を教師が行い、日常補習・特別補習は「演習って形で問題を解いてもらう」(E先生の語り)場合もあるが、ほとんどが授業とは異なる教材を用いながら、教師が講義形式で進められる。A先生は「授業でわからないとか、もっとレベルの高い問題を教えるために補習があるわけでしょ？だったら授業と同じ内容では意味がないから教材は全部作り直すよ。」と言い、補習を受ける生徒に合わせて教材づくりを行っている。このような進学対策を行なう背景について、教師は以下のように語っている。

〈A先生の語り〉

都会では、高校ではなくて予備校で勉強してるわけでしょ？ここじゃな、外部にそれほど信頼できる所がないとなると、学校単位になるじゃないですか。そこは考えるな。

〈C先生の語り〉

ここだと予備校とかもないから、全部は難しいけれども、ある程度は学校で、とは(思う)ね。模試でさえというか、都会みたいに一般公開の会場にいったら刺激ももらえと思うけど、行くのは費用も時間もかかるから、簡単に行けないから。(中略)(だから)いっぱい仕掛けを作りたいっていうのがあるかな。敵が見えないから、実感が持てないから。

A先生とC先生は、都会とY高校を比較しながらの比較を念頭において、進学指導について語ってくれた。Y高校の周辺にはなくて都会にはある予備校や模試の一般公開の会場を大学進学につながる重要な存在としてとらえている様子がうかがえる。予備校や模試の会場はただ勉強する、模試を受けるということだけではなく、C先生の言う「敵」、「実感」という言葉からもわかるように、Y高校の周辺では得られない大学受験における現実、つまりは多くの受験生の中で合格を勝ち取らないといけないことのリアリティを感じられる場として認識されている。そうした受験に対するリアリティが欠如しているY高校に対して、進学対策を豊富に行うことで、都会に負けないような環境整備が行われているのである。当然ながら、模試や補習を行ったとしても都会と同じ環境を提供することは難しい。けれども、せめてもの環境整備のために教師は創意工夫を行って、進学対策を実践しているのである。一方、生徒はこのような進学対策についてどのように受け取っているのだろうか。

〈Fさんの語り〉

筆者：学校の補習とかとってる？

Fさん：とってます。

筆者：それはいい感じに使えるの？

Fさん：使えます。ここで、学校でやれるからいいなって。手を抜かんとできるっていうの
がいいなって。みんな受けてるし、夏休み中とかは補習受けて、そのあと学校で勉強してって感じですよ。学校ある日も、放課後に補習とか設けてくれてたりとかして、

そのあと残ってとか。

〈Gさんの語り〉

筆者：模試も受けてる？

Gさん：毎回受けてます。現実知れるし。

筆者：予備校とか別の会場に受けに行くことはないの？

Gさん：あーそういうのあるんですね。学校で受けるものだと思ってたから行ったことないです。

筆者：学校の先生は模試を受けなさいって言うの？

Gさん：言いますね。でも、言われなくても受けますよ。まァ学校のテストと一緒にですよ。ちょっと範囲が広いテストって感じ。

生徒たちは学校で実施される進学対策について、肯定的な印象を語ってくれた。地方高校においては、生徒が学校にコミットメントする割合が高いことが明らかにされているが⁽²⁴⁾、Y高校の生徒も進学対策に順応している様子がうかがえる。具体的には、放課後に実施される日常補習は大学進学を志望する生徒のうち約8割が受講し、模試については約9割が受験している⁽²⁵⁾。またGさんの語りによると、模試を学校以外で受験できることを知らない様子がうかがえる。実際に、他の生徒も学校以外の場所(予備校等)での模試の受験経験はなかった。さらに、模試は学校で行われているテストと同様の位置づけとして認識されている様子がうかがえる。これらのことから、教師の用意している進学対策は、生徒にとっては学校生活における当たり前存在として受け入れられていると言えよう。さらに、Y高校の進路指導全般についても聞き取りを行った。

〈Iさんの語り〉

筆者：じゃあ、Y高のもう少しこうしてほしいなとかある？

Iさん：いや、さまざまです。

筆者：さまざまかあ。

Iさん：いや、ほんと、「Y高校に来てよかったな」しかないんで。

〈Jさんの語り〉

筆者：Y高校の進路指導はどう？いい感じ？

Jさん：はい。先生が積極的にやってくれるんで。

筆者：もっとやってほしいと思う？

Jさん：「多いな」って思うくらい。(笑)でも「ありがたいな」ってほうが大きい。

進路指導全般においても肯定的な印象が語られている。模試や補習といった進学対策への具体的なコミットメントに加えて、生徒から教師への精神的なコミットメントが教師と生徒の信頼関係を築くための1つの契機となっているといえる。また進学指導に限らず、日々の学校生活の中での教師と生徒の信頼関係の強化につながる可能性もある。教師が生徒のやりたいこと(大学進学)を支援しようという気持ちから、不十分ながらも都会に劣らないような環境整備を行うことで、結果的には生徒との信頼関係へとつながる可能性が示唆される。

5 まとめと考察

本稿では、地方からの大学進学における進路指導の様相を明らかにすることを目的として、Y高校の教師・生徒のインタビューデータを中心として分析を行ってきた。本稿の知見を要約すると次のようになる。

まず、大学進学の文脈における地方独自の価値観として、生徒が地元回帰のための大学進学という価値観を持っていることがあげられる。本稿で用いたデータでは、研究参加者の多くが「地元に戻ってくることを希望し、なかには地元に戻ってくるための学部(職業)選択を行っている生徒もいた。そのため、大学進学はあくまで一時的な人口流失だと考えられる。こうした地域移動を念頭に置いた大学進学に対して、教師は生徒のやりたいことを支えることを第一としながら、その背景にはY高校から大学進学者を輩出することが地域への貢献になると考えていた。地域にとって必要な人材を大卒者と考えたうえで、具体的な進路指導を行っているのである。

そうした具体的な指導について教師は生徒の「やりたいこと」、すなわち大学へ進学したいという希望を原動力としながら、都会を比較軸としたさまざまな具体的な方策をたてていた。つまり、地方からの大学進学では受験へのリアリティが不足するため、学校が模試や補習を実施して環境整備を行うのである。生徒は補習や模試といった進学対策を肯定的にとらえ、そうした環境整備を当たり前の存在としてとらえていた。加えて、教師からの指導に対しても感謝の気持ちを持っており、教師側の熱心な働きかけは生徒と教師の信頼関係の構築につながっていた。

つまりは、教師が地域の人材育成を担うことと生徒の希望を叶えることという使命感を背景として、熱心な指導が行われ、それによって生徒は教師に信頼感を抱き、大学進学へとつながっているといえる。大学進学をする人材が貴重であり、またそれを輩出する機関が希少である地方においては、教師が地域を支える意識を持ちながら生徒の要望を実現するために教育実践を繰り返し広げることによって、地域の人材育成が機能しているといえる。

本稿では、地域移動を前提とした状況での地方からの大学進学について分析を行った。「地方の地方」として地方の課題が集積する地域であるが、一定層を大学へ進学させるということは当該地域に大卒者が帰ってくる可能性をもつ。このことは、大学を卒業したことで得られる資格や能力を活用して地域の労働力として期待できることは当然ながら、大卒者が一定数存在することは当該地域の教育文化にも影響を与える⁽²⁶⁾。地方における人口減少やそれに伴う人出不足に対して、高校教育は大学進学者を輩出する機能を円滑に運営することで地域の人材を育てる重要な機関として位置づけられる。本稿の知見は、高校教育の現場にたつ教師にとっては当たり前の光景かもしれない。しかし、これから人口減少が進むにつれて、地方と呼ばれる地域は増えていく。そうした時に、地方では当たり前だといわれる実践を分析して、その実践に含まれる普遍的な知見を理論化していくことが必要だといえる。

本稿では、生徒・教師あわせて10名の語りから、地方高校における日常的な進路指導の様相を明らかにしたが、代表性の観点から量的分析をふくめたさらなる調査・分析が必要だと考えられる。また、高校生がなぜ地元回帰を志望しているのか、または教師がどのようにして現在の指導法を確立させていったのかといったプロセスは明らかにできていない。これらの点については学校文化が形成されていった経緯を歴史的にひも解く必要があるだろう。今後の課題としたい。

【注】

- (1) まち・ひと・しごと創生本部ウェブページ, 2018, 『『まち・ひと・しごと創生総合戦略2018 改訂版』の全体像』, <https://www.kantei.go.jp/jp/singi/sousei/info/pdf/h30-12-21-sougousenryaku2018zentaizou.pdf>, 閲覧日2018年12月25日.
- (2) 独立行政法人労働政策研究・研修機構, 2015, 「資料シリーズ No.162 若者の地域移動—長期的動向とマッチングの変化—」, <http://www.jil.go.jp/institute/siryo/2015/162.html>, 閲覧日2018年4月20日.
- (3) 主に大学進学時における地域移動の実態とその要因についての研究が蓄積されている。例えば, 秋永雄一・島一則, 1995, 「進学にともなう地域間移動の時系列分析」東北大学教育学部『東北大学教育学部研究年報』第43集, pp.59-76. など.
- (4) 津多成輔, 2017, 「大学の都市部集中と大学進学機会:1990年から2015年の自県/県外進学率・収容率の変化に着目して」日本高校教育学会『日本高校教育学会年報』第24巻, pp.16-25.
- (5) 樋田大二郎・樋田有一郎, 2018, 『人口減少社会と高校魅力化プロジェクト—地域人材育成の教育社会学』明石書店.
- (6) 同上, p.65.
- (7) 藤井(南出)吉祥, 2013, 「ネットワーク形成・維持の基盤」『高卒5年 どう生き, これからどう生きるのか:若者たちが今〈大人になる〉とは』大月書店, pp.213-245. なお, この研究の対象は都市部にある高校であることには留意が必要である.
- (8) 石戸谷繁, 2004, 「ローカリティ—を生きる—『郡部校』生徒の進路選択」古賀正義編『学校のエスノグラフィ—事例研究から見た高校教育の内側—』嵯峨野書院, pp.94-119.
- (9) 尾川満宏, 2010, 「トランジションをめぐる『現場の教授学』—ある地方工業高校における学校と職業の接続様式—」日本子ども社会学会『子ども社会研究』第16号, pp.3-16.
- (10) 吉川徹, 2000, 『ローカル・トラック』世界思想社.
- (11) 文部科学省初等中等教育局, 2011, 「第1章キャリア教育とはなにか」『高等学校キャリア教育の手引き』, p. 40. http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2011/11/04/1312817_07.pdf, 閲覧日2019年4月14日.
- (12) 大多和直樹, 2014, 『高校生文化の社会学:生徒と学校の関係はどう変容したか』有信堂.
- (13) 古賀正義, 2001, 『〈教えること〉のエスノグラフィ』金子書房.
- (14) 尾川満宏, 2010, 「トランジションをめぐる『現場の教授学』—ある地方工業高校における学校と職業の接続様式—」日本子ども社会学会, 『子ども社会研究』第16号, p.4.
- (15) 朴澤泰男, 2016, 『高等教育機会の地域格差—地方における高校生の大学進学行動』株式会社東信堂.
- (16) 卒業生のうち残りの50%は, 約30%が短期大学もしくは専門学校へ進学, 約10%が就職, 約10%は進学もしくは就職準備, または未定となっている。Y高校『学校要覧』における「進路情報」掲載事項より算出した。
- (17) 例えば前掲津多論文など.
- (18) 小西二郎, 2005, 「思想のフロンティア 日本社会の大転換を生きる青年」, 唯物論研究協会, 『唯物論研究会年誌』第10号, p.237.
- (19) 秋永雄一・島一則, 1995, 「進学にともなう地域間移動の時系列分析」東北大学教育学部『東北大学教育学部研究年報』第43集, pp.59-76.
- (20) 石戸谷前掲論文.
- (21) Y高校『学校要覧』における「進路情報」掲載事項より算出した。
- (22) 大多和直樹, 2014, 『高校生文化の社会学:生徒と学校の関係はどう変容したか』有信堂.
- (23) Y高校『学校要覧』における「進路情報」掲載事項を整理した。
- (24) 堀有喜衣, 2003, 「地方における就職希望者の進路選択—都市部との比較をもとに」日本労働研究機構『学校から職場へ』調査研究報告書 No.154, pp.65-78.
- (25) Y高校進路指導部提供資料(2014年度から2018年度より)平均値を算出した。
- (26) 片瀬一男・阿部晃士, 1997, 「沿岸地域における学歴主義と教育達成—『利口, 家もたず, 達者, 家もたず』—」日本教育社会学会『教育社会学研究』第61集, pp.163-183を参照。